

# 鹿島槍ヶ岳冬山偵察行

- 11/ 5 (金) 新宿駅発 18:00 - 信濃大町 21:58 - タクシー大谷原 22:30 (テント泊)  
快晴
- 11/ 6 (土) 大谷原発 5:05 - 西俣出合 6:00~ 6:15 - 高千穂平 9:20~ 9:40 -  
快晴 赤岩尾根分岐 13:35~ 14:20 (稜線南方ピーク往復) - 冷池小屋  
14:30 (小屋泊)
- 11/ 7 (日) 小屋発 5:00 - 布引岳 (2680m) 7:00~ 7:20 - 小屋 8:20~ 8:45 -  
快晴 高千穂平 10:40~ 11:00 - 第ベンチ 11:30~ 11:40 - 西俣出合  
12:20~ 12:30 - 大谷原 13:30

北義経会

2010.11.5 6 7

金子晴彦 佐野陽一郎

- そこに記憶の中の雪の鹿島槍はひとかけらも無かった。最後に登ったのは40年前のことだから当然か。大谷原も、西俣出合いも、高千穂平も、冷池も、どこもかしこも目新しかった。
- しかし、爺の南尾根のラッセルや、主稜線の猛吹雪の辛さは覚えている。冷たさや、辛さと言ふ形にならないものが記憶に残っている。
- かくてこのたびの山旅は40年前の頃の記憶と永遠に変わらない山の再会となった。年をとってなお生きているほぐ言ふ肉体が両者をつないでそれを可能にした。では、そこで一体どう感じたのか。
- 布引岳で時間切れとなり雪稜を下りながら、肉体ははるかな青春の日々に躍動していた自分に戻ったような気がした。しかし、山はひたすら厳しく高く、雪の斜面は恐怖に満ちていた。それは若いころの受け止め方とは違った。
- 山に登り続けるとはそういうことなのだ。変わらぬものに相対し続けることによってほぐは変わる自分を知り、生きる実感をつかむ。
- だからこそ思い出を抱えながら、今の自分を確かめに繰り返し同じ山へと登りたいのだ。



大谷原カラマツ黄葉と布引、鹿島槍主稜  
2010.11.7 下山時



夜の闇の中でタクシーの窓から眺める鹿島部落は真っ暗で一つの明かりもなかった。その先の林の中に真新しい山荘がいくつかあり、明るい街灯が点いていた。住人は変わった。

橋のたもとの駐車場で下車。沢音が高く、空には無数の星がきらめいている。

一体何年ぶりの大谷原だろう。寒くはないがなかなか寝つけない。

偵察だから軽く行こうと言うことで20KG以下に抑えた。それでも最後にワカンが入り、そして水が乗った。

真っ暗な林道を登って行く。道の砂が湿っていて雪が溶けたばかりだと分る。

5時過ぎにはランプがいらぬほどに明るくなった。最後の角を曲がると正面の谷の上に純白の鹿島槍南峰が姿を現した。

山道はこんな楽しみを隠していてくれる。それを思い出した。





西俣の砂防ダムには細いトンネルが有りそこを抜けて  
対岸にわたり赤岩尾根に取りつく

さすがに急だ。しかし ぼくは既に南で散々急坂を  
登っている。荷物も比較的軽い。

快調に登り 積雪が現れた頃に樹林が切れて鹿島  
の南、北峰そして東尾根が姿を見せた。ちょっと南とは  
違う迫力だ。む！ とうなる。無事行けるのか？

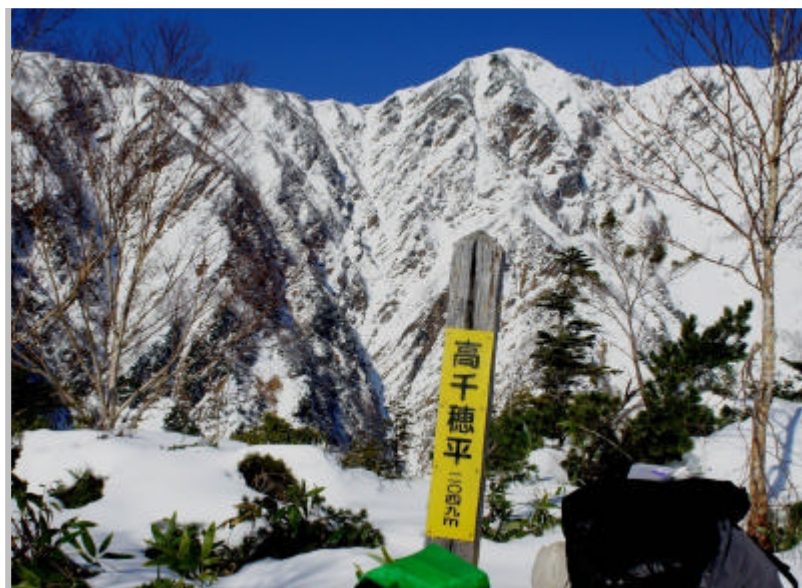
尾根の左の広大な西俣はひたすら  
急斜面をつのらせ 爺岳北峰に突き  
上げている。その奥壁がすぐそこに  
見える。素直な稜はひとつもなく  
それぞれが無数の断壁に断ち切れ  
そこに雪が張り付き、まるでヒマラヤ  
巒のような。1960-61にかけてわが先輩  
達がこの一帯の開拓に努めたらしい。

しかし爺はこんなに立派だったっけ？  
見たことが無いのか？ それとも見ても鹿  
島に気をとられていたのか？ 後者だとす  
ると反省が必要だ。先輩が魅かれただけに  
実に圧倒的で立派な姿だ。



年末冬山となると4人で行動する北義経会だが偵察などはそうは限らないので今回は金子、佐野コンビとなった。心やさしい佐野といさめ乱暴な金子。

初めての2人だけの山だ。一体どうなるか。



45分くらい歩いて15分くらい休憩。これが次第に定例化し始めている。

かつては50分 10分だった。それがどうもきつい。同じ世代のグループなのでそうした点に関しては自然に皆の合意が生まれる。





高千穂平まで高度差 700m  
3時間かかった。荷物が  
軽いはずなのにかなりきつ  
い。雪も出て来た。

正面の北股本谷になだれ  
落ちる稜線はそれぞれ実  
に急峻だ。ダイレク尾根とは  
これだったか？山岳部部室  
での古い会話をこわごわ思い  
出す。

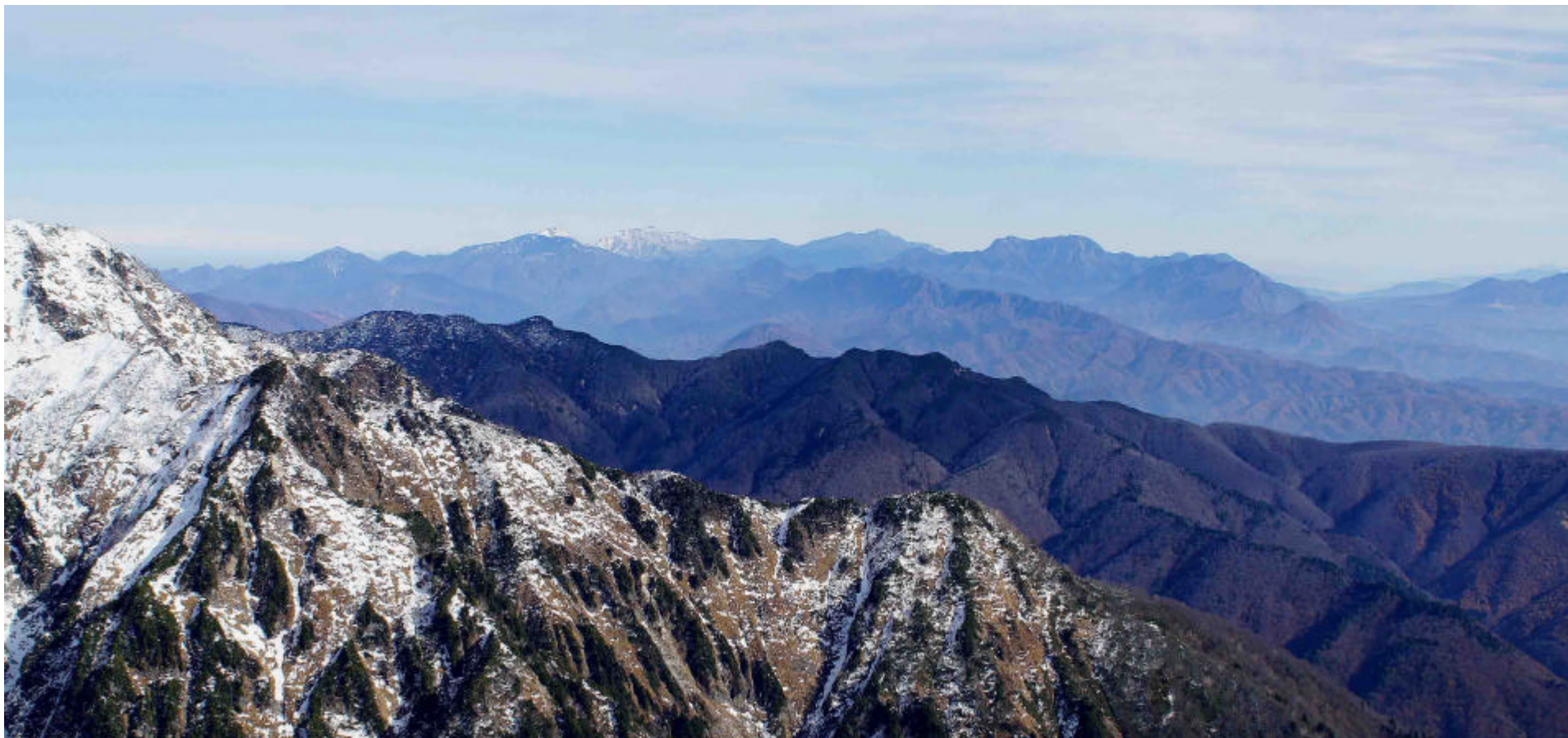
しかしここでは  
振り返りさえす  
ればおだやかな前山が見下  
ろせる  
南アルプスとは  
違って人里はすぐ  
そばだ。



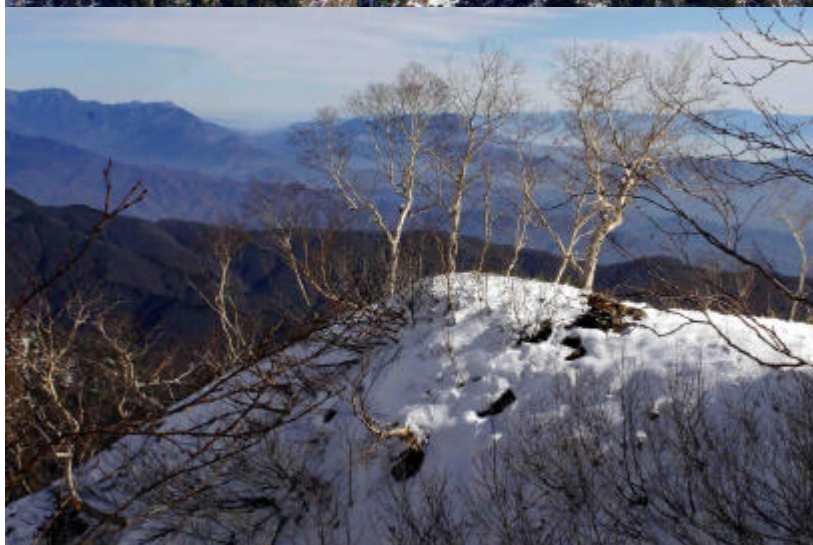
ここから主稜線までの今回のハイライト部分は登りでは全く撮影の余裕が無かった。このため下りで撮った写真を逆に並べてまとめている。



高千穂平を出発して東の間平穏な道が続いたが、20分もすると突然笹の上に新雪が積もった急斜面が現れた。膝で雪を押し足場を作っても、その下が笹なので足が止まらない。幾度も滑ってやり直し。これはえらいことになったかな? と思いつつ、まだアイゼンを付けるまでの気にはならなかった。



妙高、黒姫、戸隠



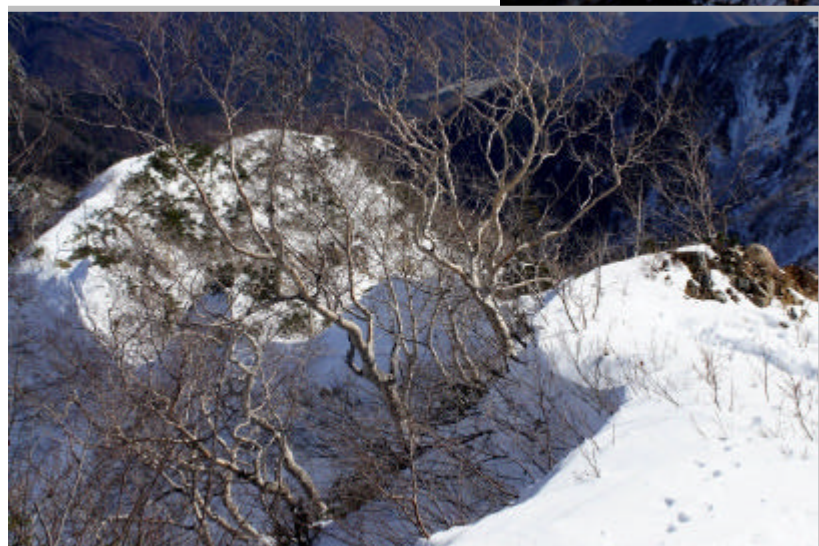
稜線には見事な景色が広がるが眺める余裕が次第に無くなって来る  
ぜいぜいハーハー言いながらひたすら登りつづける。



谷をはさんだ反対側の尾根の上に冷小屋の屋根が見えた。しかし、また相当に登らないとこの谷はトラバース出来そうじゃない。



とうとう主稜線が見えてきた。はるか上の方にトラバースの踏み跡が見える。



樺にぶら下がるようにして登って行くと3つの浅い谷が現れる。そこを水平にトラバースしなければ主稜線には出られない。雪が少ない今の時期はいいものの、真冬には正に雪崩の通り道、滑り台だ。雪が少なく固まっている時にしかこのレークは使えない。若いころはともかく今ははっきりとそう思った。



北面であまり日の当たらないここでは古い踏み跡が雪面上に浮き出て見えるものの、雪は膝ほどの深さがあった。最初はまだしも、傾斜が急になると膝で前の斜面を崩しそこに足を置くというソレル工法が必要だった。



それを嫌って左手の岩尾根に逃げたものの上部で沢に下りられなくなり、再び戻って死に物狂いのラッセルが始まった。まず直上し、次いでトバース。



あまりその気の無いままにやって来たが相手は本格的だった。岩尾根からの撤退の折にアイゼンだけは付けたので歩きやすくなったものの手袋は薄いものだった。すぐに濡れてびしょびしょになる。不安定な斜面にザックを置き、代わりの手袋を出した。時間ばかりが過ぎ、ステップは増えない。高千穂平では冷池小屋には12時には着くだろう、なーんて言っていたのがそれどころではなくなった。



雪がしっかりしているからまだ良い。これが深い新雪だったら一気に雪崩だ。



雪崩を避けるためにこの稜線を登ると言っ案内書もあったがとても登れそう無い。



一つ目の沢は急だった。滑落すれば本谷に転がり落ちそう。二つ目の沢は長い。しかも途中で雪の下に岩が有り一段上がる必要があった。これが滑ってなかなか上がれない。帰りは楽だったが、何も無い行きにはえらく苦労した。

退避ルート尾根を見上げてとても登れそう無い。



三つ目のトラバースは沢と言ったりは斜面で少し気が楽になる。正面右手の主稜の上に黄色い標識も見えてホッとする。しかしわずかな距離のこの3つのトラバースに3時間もかかってしまった。あとから2人パーティーが登って来たが追いつかずに、ぼろが踏み跡をつけるのをゆっくっていた。ラッセルの無い雪山なんて冬山では無いなんて強がりを言ったのはどうにか抜けられそうになったからだった。



暗い中を歩き始めて8時間半、予想外に時間がかかりようやく住稜線に出た。途端にそれまでの疲れは吹っ飛んだ。北アルプスの核心部の山々がどうだ！とでも言うように圧倒的な姿を見せた。ザックの背負紐を振りほどき、首を叩き込む重い荷物から解放されてまるでヒマラヤのような景色に見入った。きっと忘れたのだからこんな眺めは初めてだ！心底そう思う。健忘症にはかつて登ったなんてことは何の意味もない。山は常に今でなければならぬのだ。

布引、鹿島槍南峰、北峰



劔

池の平山



「点の記」の映画の迫力に感心した。ところが目の前に現れた本物の劔はそれをはるかに超えていた。

爺北峰

爺南峰



稜線を南へ少し登って小さなピークに立った。その先に爺の3峰が続いている。遥かな道だ。



ピークから一旦下り 登り返すとシラビソの林の中に立派な冷池小屋がある。テントを張ってから布引岳の方へ偵察にでかけた。剣の夕景色が見たかった。

10分ほど登った夏の幕営地からは南方に爺の北、中央、南峰が並んで見える。爺の東尾根を登り この山々の斜面をトバースして鹿島槍に到る。当初の構想だったがこれを歩き通せるのだろうか？ 爺だけで精一杯ではなからうか。赤岩尾根でぐたびれ果てた肉体はノと言った。それが今のぼくらだ。

冷池小屋

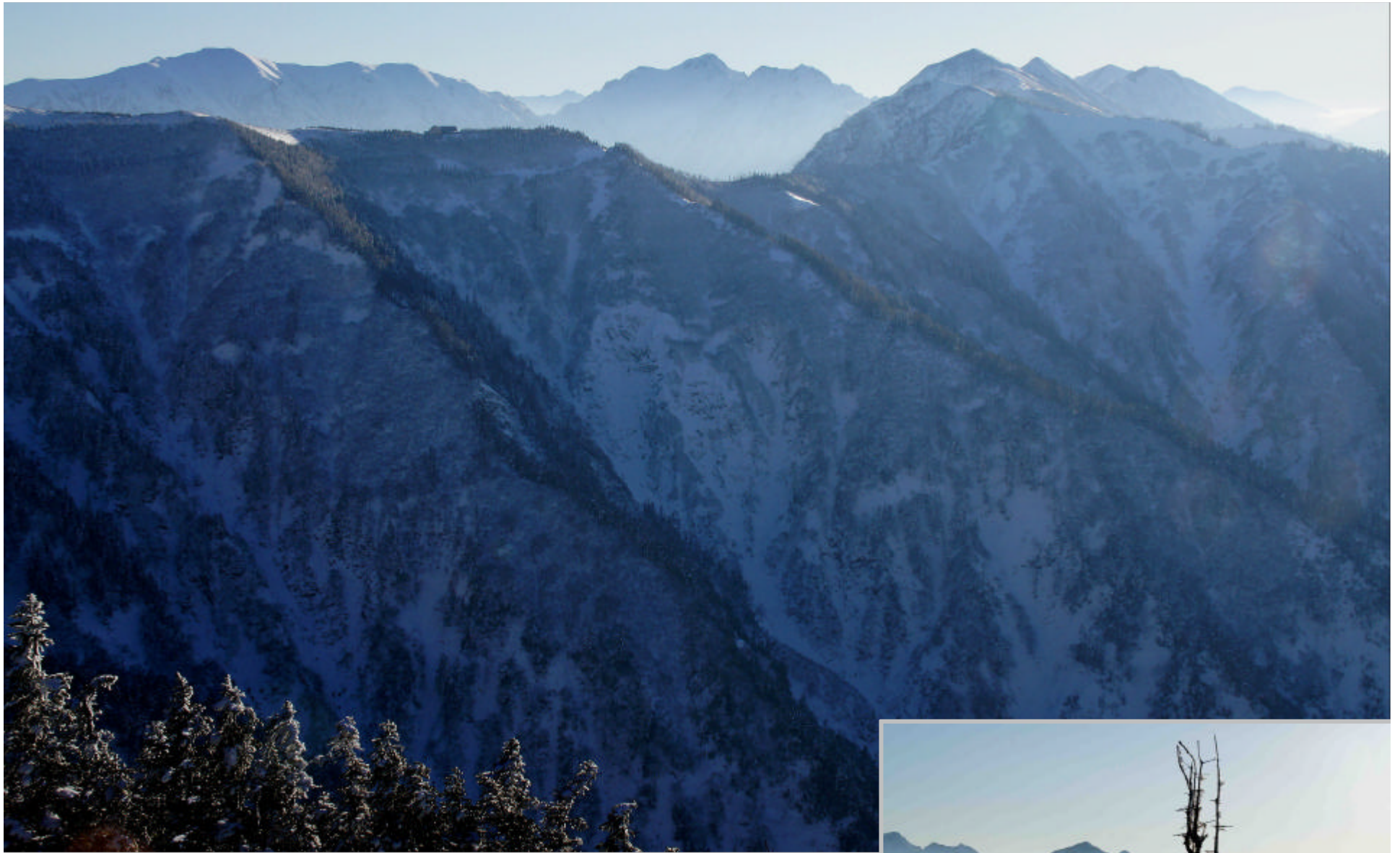




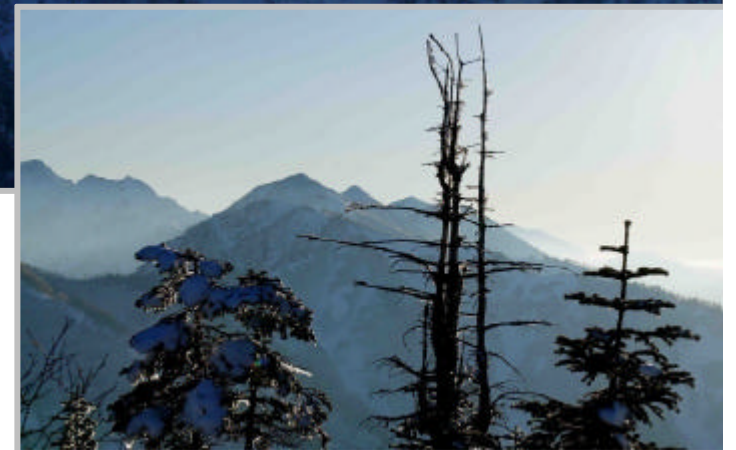
鹿島槍黄昏



劍

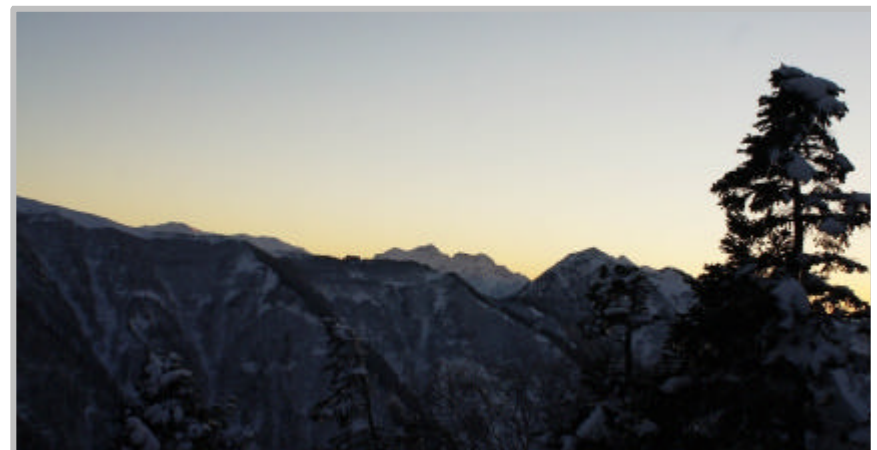


針の木岳





16:49



2010.11.7



冷池小屋には冬用の部屋が有り解放されていた。

一旦テントを外に張ったもののそこがいと移動した。風も無く雪も無くそして暖かく居心地が良い。簡単な夕食を終え酒を飲んでいる内に6時を過ぎると一日の疲れでもう眠くなってしまった。穏やかな雪の中の夜だった。

朝は4時起床、5時に歩き出す。足もとに朝靄にかすむ信濃の里が広がる。浅間山が思いがけず大きく富士ははるかに小さい。





7:14

稜線のラッセルは結構あった。しかし天気が良く風もそれほど強くないので快調だ。予定の2時間で布引岳に着いた。



さらに鹿島槍に進むと往復最低2時間はかかる。赤岩尾根の下りを考えると時間と体力をセーブしたい。二人とも期せずして同じ考えだった。



偵察の実はいかに果たした。あたりの景色をゆっく眺めて下りにかかった。何としても頂上というこだわりはあっさり消えていた。



針の木岳





三の窓

小窓

チンネ





雪の稜線下山

雷鳥の足跡



雷鳥出現





布引岳





信濃の里

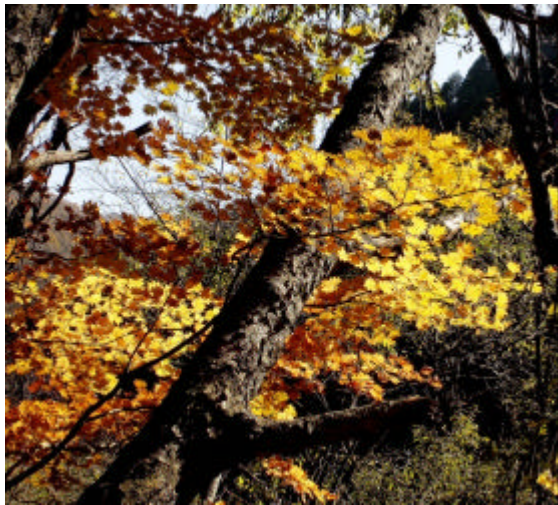


わずか2日で北アルプスの核心部にふれた。それだけに苦しい登山を強いられたがどうか耐えた。無事登れるか？」という出発前のもう一つの重荷が消えて、下りの足取りはいた軽い。



入山の折のタクシーの運転手は今年の紅葉は駄目だと言っていたがそんなことは無い。カラマツは思い切って黄色く 楓は赤く ブナは黄色い。おかげで紅葉とラッセルの両方を楽しめた。

紅葉街道





大谷原よ布引岳

了